よくわかるイギリスの文学

The Poetry and Prose of British Literature

清宮倫子
清宮協子 編著

NAN'UN-DO

出典リスト　＊番号は章番号を示す

1. *The Works of Geoffrey Chaucer* (London: Oxford UP, 1966) p.17.
2. *Edmund Spenser: Poetical Works* (London: Oxford UP, 1912) p.575.
3. *William Shakespeare: The Complete Works* (London, Oxford UP, 1986): Sonnet 27, p.782;
   Romeo and Juliet , pp. 377-8;
4. *Hamlet*, pp. 697-8; *Macbeth*, pp. 991-2.
5. *The Holy Bible* (London, Oxford UP, 1989) "The New Testament" pp. 5-6.
6. *The Poems of John Milton* (London: Longman, 1968) pp.458-62.
7. *The Pilgrim's Progress* (London, Oxford UP, 1928) pp.94-7.
8. *Donne: Poetical Works* (London, Oxford UP, 1971) pp.36-7.
   Alexander Pope: An Essay on Man (Yale UP, 1950) pp. 53-5.
9. *Pamela* (London: J.M.Dent & Sons, 1914) Vol. 1, pp. 342-3.
10. *Pride and Prejudice* (London: Macmillan, 1964) pp. 322-3.
11. *The Lyrical Ballads* (London: Methuen, 1940) p.8.
    Wordsworth: Poetical Works (London: Oxford UP, 1904) p. 149.
12. *Shelley: Poetical Works* (London: Oxford UP, 1905) p. 602.
    Keats: Poetical Works (London: Oxford UP, 1956) p. 207.
13. *Tennyson: Poetical Works* (London: Oxford UP, 1953) p. 111.
    Browning: Poetical Works (London: Oxford UP, 1905) p. 314
14. *Arnold: Poetical Works* (London: Oxford UP, 1942) pp. 210-1.
    Arnold (London: Rupert Hart-Davis, 1954) p. 503.
15. *Great Expectations* (London: Everyman, 1907) p. 448.
16. *Vanity Fair* (London: Everyman, 1904) pp. 422-3.
17. *Jane Eyre* (London: Penguin, 2006) pp. 292-3.
18. *Wuthering Heights* (London: Everyman, 1907) pp. 66-8.
19. *Middlemarch* (London: Everyman, 1930) Vol.2, pp. 328-9.
20. *Tess of the d'Urbervilles* (London, Macmillan, 1974) pp. 100-1.
21. *W. B. Yeats: The Poems* (London, Macmillan, 1983) pp. 39.
    T. S. Eliot: Collected Poems 1909-1962 (London: Faber and Faber, 1963) p.63, ll.1-16
22. *The Portrait of a Lady* (New York: Charles Scribner's Sons, 1936) Vol. II, p.196-7.
23. *Sons and Lovers* (London: Cambridge UP, 1992) pp. 463-4.
24. *Ulysses* (London: Bodley Head, 1960) pp. 871-2.
25. *Mrs. Dalloway* (London: Hogarth Press, 1976) pp.203-4.
26. *Philip Larkin: Collected Poems* (Faber and Faber, 1988) p.3, ll.1-11.
    Ted Hughes: New Selected Poems 1957-1994 (Faber and Faber, 1995) p.29, l.27-p.30, l.22.
    ◻ Both published by Faber and Faber Ltd.
    English reprint rights arranged with Faber and Faber Ltd. through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo
27. *The Collector* (London: Vintage, 1998) p. 244, l. 17-p. 245, l. 23.
    ◻ English reprint rights arranged with Aitken Alexander Associates through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo
28. *The Millstone* (London: Penguin, 1965) p.127, l.5-p.128, l. 11.
    ◻ English reprint rights arranged with Intercontinental Literary Agency, London on behalf of the author through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

はしがき

わが国の英語教育も約150年の歴史を持つに至り、その内容も変化してきた。国際的規模のコミュニケーションが盛んになり、技能が重視されるようになった。ニーズが教育内容を決めるのは当然のことである。しかし、即戦力のみを重視する教育内容にはやはり問題があるのではなかろうか。外国人とコミュニケーションする際に、技能だけで充分といえるであろうか。筆者は10年以上、大学でイギリス文学史を講じてきて、心の滋養としての文学に関心を持つ学生が少なくないことを確認している。

それでは、どのような文学をどのような形で提供したらよいのであろうか。かつてエリートをエリートたらしめた「教養」という形のイギリス文学は見直されなくてはならない。実感を伴わない知識という形では、英語教育のなかで文学は生き残れないであろうと思われる。国際社会が形成され、日々外国の情報が溢れている今日だからこそ、もう一度、英語教育のなかでの文学を考えてみようという試みの結果誕生したのがこのテキストである。

以下にこのテキストの特色を述べる。従来、イギリスの文学史は解説書として存在し、書物としては、作品の抜粋とは別個に扱われていたが、今回これを1冊にまとめた。さらに、作品の抜粋と解説を見開きに収め、作品を鑑賞する「ポイント」(設問)を付け、文学史的な概説は簡潔にして後に回した。これは、まず作品に当たることにより、感動を引き出し、知識としてのイギリス文学史から脱却しようというねらいである。したがって作品の選択は、筆者のイギリス文学史観に沿うものなので恣意的であることを免れてはいない。しかし、だからこそ全体としてまとまりをつけることが出来たと考えている。従来わが国では、イギリスの文学史は、日本人によって作成される場合、複数の著者によって書かれることが多かった。これは専門的な知識を正しく詳しく伝えるという点で長所となったが、一貫性という点で問題を残していた。ひとりの人間の感動をすっきりした形で伝えることの方が、専門的知識を押しつけて、いたずらに文学は難解であるという印象を与えるより、はるかに重要だと考えた。作品のなかで抜粋された箇所は、いずれも筆者が印象的だと感じ、いつまでも心に残った場面である。さらに、CDを用意したことにより、詩の鑑賞はもとより、小説の鑑賞も一層深まると確信している。

作品の抜粋とそれに関連する部分は、28課で構成されているが、概説は序論と14章にまとめてある。これは序論を含めて、イギリス文学史の講義を通年科目として講じる場合の、半期15回に合わせたためである。各章に合わせて適宜、課を選んで使って下さればよいと思う。通年の場合は、2回につき概説1章を当てればよいということになる。また、本書の28課は、独立したものとして扱うことも可能であり、ばらばらにして使っても一向にさしつかえない。

イギリス文学は大人の文学である。翻訳書では決して分からない文学作品の滋味を、原文を通してしみじみ読むことが至福と感じられるようになると素晴らしいと思う。概説をギリシア・ラテン文学の古典から始めたのは、日本人がイギリス文学を見る場合は、ヨーロッパ文学の起源をまず基礎として押さえる必要があると考えたからである。イギリス文学はこれらの古典から、極めて大きなインスピレーションを引き出している。『ベオウルフ』から語り始めるイギリスの文学史を学ぶことに汲々としていると、そのようなことさえも気づかない。ここから世界文学へと視野を広げて行けばさらに

イギリス文学の特質が明確になると考えた。このようなイギリス文学の基準を提供するという方針に沿って、近年研究者の間で盛んに行われている、アイルランドやアメリカ出身の作家の作品を分離して扱う立場は取らなかった。また、カナダやオーストラリア等の文学への言及も控えた。

英文は、浮き輪なしで海に飛び込むつもりで読んでほしい。かつてのように、辞書と首っ引きで一語もゆるがせにせずに解読しなければ読んだことにはならない、などと力む必要は全くない。言葉の羅列のなかから自分で何かをつかめばよい。次第に、作者の体臭のようなものが感じられてくる。好みの作家を発見出来れば幸運である。したがって、単語の注釈は、筆者の読みに従って、易しいものまで付けておいた。ただひとつの心残りは、作品の抜粋部分の分量を非常に少なくせざるを得なかったことである。散文は言うに及ばず、短詩までも一部を割愛せざるを得なかった。

なお、このテキストの抜粋の選択、注釈、解説、概説は、清宮倫子が執筆し、地図、年表、索引は清宮協子が作成した。

2011年9月1日

清宮倫子

目　次

はしがき …… 3
1. ジェフリー・チョーサー　『カンタベリー物語』 …… 6
2. エドマンド・スペンサー　『アモレッティ』 …… 8
ウィリアム・シェイクスピア　「ソネット　27」
3. ウィリアム・シェイクスピア　『ロミオとジュリエット』 …… 10
4. ウィリアム・シェイクスピア　『ハムレット』『マクベス』 …… 12
5. 欽定訳聖書（現代語訳）　「マタイによる福音書」
第6章第19節－第7章第6節 …… 14
6. ジョン・ミルトン　『楽園喪失』 …… 16
7. ジョン・バニヤン　『天路歴程』 …… 18
8. ジョン・ダン　「蚤」 …… 20
アレクザンダー・ポープ　『人間論』
9. サミュエル・リチャードスン　『パミラ』 …… 22
10. ジェイン・オースティン　『高慢と偏見』 …… 24
11. ウィリアム・ワーズワス　「抒情民謡集序文」「らっぱ水仙」 …… 26
12. P・B・シェリー　「ひばり」 …… 28
ジョン・キーツ　「ナイチンゲール」
13. アルフレッド・テニスン　「鷲」 …… 30
ロバート・ブラウニング　「私の前公爵夫人」
14. マシュー・アーノルド　『教養と無秩序』「ドーヴァー・ビーチ」 …… 32
15. チャールズ・ディケンズ　『大いなる遺産相続の見込み』 …… 34
16. W・M・サッカレー　『虚栄の市』 …… 36
17. シャーロット・ブロンテ　『ジェーン・エア』 …… 38
18. エミリー・ブロンテ　『嵐が丘』 …… 40
19. ジョージ・エリオット　『ミドルマーチ』 …… 42
20. トマス・ハーディ　『ダーバヴィル家のテス』 …… 44
21. W・B・イエイツ　「イニスフリーの湖島」 …… 46
T・S・エリオット　『荒地』
22. ヘンリィ・ジェイムズ　『ある貴婦人の肖像』 …… 48
23. D・H・ロレンス　『息子は恋人』 …… 50
24. ジェイムズ・ジョイス　『ユリシーズ』 …… 52
25. ヴァージニア・ウルフ　『ダロウェイ夫人』 …… 54
26. フィリップ・ラーキン　「行く」 …… 56
テッド・ヒューズ　「とまる鷹」
27. ジョン・ファウルズ　『コレクター』 …… 58
28. マーガレット・ドラブル　『碾臼』 …… 60
地図 …… 62
イギリス文学史概説 …… 63
イギリス文学年表 …… 92
作品・事項索引 …… 93

ジェフリー・チョーサー
Geoffrey Chaucer

The General Prologue to *The Canterbury Tales* (1400)

CD 1-2

Whan that Aprill with his shoures soote
The droghte of March hath perced to the roote,
And bathed every veyne in swich licour,
Of which vertu engendred is the flour;
Whan Zephirus eek with his sweete breeth
Inspired hath in every holt and heeth
The tendre croppes, and the yonge sonne
Hath in the Ram his halve cours yronne,
And smale foweles maken melodye,
That slepen al the nyght with open ye
(So priketh hem nature in hir corages);
Thanne longen folk to goon on pilgrimages,
And palmeres for to seken straunge strondes,
To ferne halwes, kowthe in sondry londes;
And specially from every shires ende
Of Engelond to Caunterbury they wende,
The hooly blisful martir for to seke,
That hem hath holpen whan that they were seeke.

詩の読み方

英詩を鑑賞する際には、まず詩が伝えたい内容を正確に受け取り、次に韻律を味わい、最後に頭の中にイメージをしっかり描くという3点を心掛けることが大切である。詩と散文とは、形態と韻律において大きな違いがある。

詩において、短い複数の行（line）がひとまとまりになった部分を連（stanza）という。リズムの単位となっているのは「詩脚」(foot) で、弱強、強弱、弱弱強、強弱弱などがある。たとえば、From hill/to hill/ it seems /to pass の / で区切った部分が「詩脚」で、この行は弱強4歩格となる。また、各行末の音をそろえたり（脚韻 end rhyme)、行中で韻を踏んだり（行中韻 internal rhyme)、各語の頭で韻を踏んだり（頭韻 alliteration) する。行末の脚韻を aa,bb,cc,dd とそろえるのを「対韻」またはカプレット (couplet rhyme) といい、abba, cddc, effe とそろえるのを「囲い韻」(enclosing rhyme) といい、abab, cdcd, efef とそろえるのを「交互韻」(cross rhyme) という。さらに、イメージで重要なのは、比喩と擬人法と象徴である。比喩には、喩えるものと喩えられるものを直接比較する「直喩」と、類似点によって同一化する「隠喩」がある。

古い時代の英詩では、2人称単数の活用は、thou, thy, thee, thine であり、それに合わせて動詞は、are は art に、were は wert に、sing は singest となり、三人称単数は s の代わりに th を使い、has は hath となる。

注釈

1. whan=when **whan that** "that" は現代の英語では不要。**shoures**=showers **soote**=sweet **2. droghte**=drought「日照り」**perce**=pierce **roote**=root **3. veyne**=vein「葉脈」**swich**=such **licour**=moisture「お湿り」**4. vertu**=power **engendre**「生み出す」**5. Zephirus** 西風の擬人化 **eek**=also **sweete**=sweet **breeth**=breath **6. inspire**「霊感を与える」**holt**「雑木林」**heeth**=heath **7. croppes**「若枝」**yonge**=young **sonne**=sun **8. Ram** は占星術で太陽が3月12日から4月11日まで通過するコースをさす。**halve**=half **yronn**=run **9. smale**=small **foweles**=birds **maken**=make **10. slepen**=sleep **nyght**=night **ye**=eye **11. priketh**=pricks「突く」**hem**=them **hir**=their **corage**=heart **12. thanne**=then **longen**=long「したがる」**folk** =people **goon**=go **pilgrimage**「巡礼」**13. palmere**「巡礼者」**seken**=seek **straunge**=foreign **strondes**=countries **14. ferne**=distant **halwes**=shrines **kowthe**=known **sondry**「雑多な」**londes**=lands **15. shires**「州」**16. wende**=go **17. hooly**=holy **blisful**=blissful「ありがたい」**martir**=martyr「殉教者」**18. holpen**=helped **seeke**=sick

～ 作品 ～

『カンタベリー物語』は物語集である。ロンドン郊外の宿屋で知り合った、カンタベリー英国国教会総本山詣での一行29人が、宿屋の主人の発案で、旅の退屈を慰め合うために、一人ずつ往路2話、帰路2話を語り、最も為になる面白い話をした人に、帰路同じ宿屋で、皆でお金を出し合って食事をおごることにした。24話で終わっている。巡礼に加わったのは、百姓、町人、聖職者、学者、騎士から、バースから来たおかみさんまで、様々な階級、職業を含み、彼らが代表する風俗や道徳が物語に反映されている。収集された話は、中世期に流布された種々のタイプの説話である。今では小説で扱うようなことが詩で書かれ、巡礼の一行という「ワク」の中に収まっている。ここにある「総序文」(The General Prologue) は、抜粋部分に引き続き一行29人の紹介が含まれ、その「ワク」の役目を果たしている。

～ 作者と時代 ～

ジェフリー・チョーサーは、ロンドンのワイン商の家に生まれたが、役人として当時の最高の文化に触れる機会に恵まれた。しかし、町人として庶民の人々の営みにも通じていたのが詩人としての強みとなった。外交使節として、ルネサンスの華が咲き誇っていたフランスやイタリアの文芸、特にペトラルカやボッカッチョの文学や学問に接し、学者として聖書やラテン文学の古典にも通じていた。「英詩の父」と呼ばれるのは、彼の使った言葉が、当時のロンドンのインテリや宮廷など最高の教養ある人々の言葉であったからである。

◀ルネサンスについて▶13世紀から15世紀にかけて、神中心から人間中心への文化の転換期にヨーロッパに起った文芸復興。

ポイント

1. 韻律を整えるために語順が入れ替わっている。どう入れ替わっているかを調べてみましょう。
2. ドイツ語起源の単語とフランス語起源の単語が入り交じっている。各々の例を挙げてみましょう。
3. 春が来た喜びが素直に表現されている。どの表現にそれを強く感じますか？　それは何故でしょう。韻律がその気分に合っていると思いますか？

2 エドマンド・スペンサーと ウィリアム・シェイクスピア

Sonnets by Edmund Spenser and William Shakespeare

CD 1-3

Spenser's Sonnet LXXV from *Amoretti* (1595)

One day I wrote her name vpon the strand,
But came the waues and washed it away:
Agayne I wrote it with a second hand,
But came the tyde, and made my paynes his pray.
Vayne man, sayd she, that doest in vaine assay,
A mortall thing so to immortalize,
For I my selue shall lyke to this decay,
And eek my name bee wyped out lykewize.
Not so, (quod I) let baser things deuize
To dy in dust, but you shall liue by fame:
My verse your vertues rare shall eternize,
And in the heuens wryte your glorious name.
Where whenas death shall all the world subdew,
Our loue shall liue, and later life renew.

CD 1-4

Shakspeare's Sonnet 27 (1609)

Weary with toil, I haste me to my bed,
The dear repose for limbs with travel tired;
But then begins a journey in my head
To work my mind, when body's work's expired;
For then my thoughts, from far where I abide,
Intend a zealous pilgrimage to thee,
And keep my drooping eyelids open wide,
Looking on darkness which the blind do see;
Save that my soul's imaginary sight
Presents thy shadow to my sightless view,
Which like a jewel hung in ghastly night
Makes black night beauteous, and her old face new.
Lo, thus by day my limbs, by night my mind,
For thee, and for myself, no quiet find.

◀ Sonnet について ▶ ルネサンス時代に大流行したのがソネットである。イタリアのペトラルカ式が導入され、イギリス式が造られた。主に恋愛感情を詠う。イギリス式はシェイクスピア式とも呼ばれ、1行が弱強5歩格となり、abab cdcd efef gg と脚韻を踏む。4つある連は起承転結と内容が展開しなくてはならない。

注釈

Spenser's Sonnet LXXV 1. vpon=upon **strand**「浜辺」**2. waue**=wave 以下、v が u に変わっている。**3. agayne**=again **4. tyde**=tide **paynes**=pains「苦労」**pray**=prey「餌食」**5. vayne**=vain「無駄」「無駄な [ことをする]」**doest**=do（thou）という主語が隠されている。You try to immortalize a mortal thing in vain. という意味。**assay**「試みる」**6. mortall**=mortal「死すべき」**immortalize**「不滅なものとする」**7. my selue**=myself **lyke to**=like **decay**「衰退」**8. eek**=also **bee**=be **wyped**=wiped **lykewize**=likewise「同じように」**9. quod**=said **baser**「より卑しい」**deuize**=devise「考える」**10. dy**=die **11. vertue**=virtue **eternize**「永久化する」**12. heuens**=heavens **wryte**=write **glorious**「栄光にみちた」**13. whenas**=whereas「一方」**subdew**=subdue「支配する」

Shakespeare's Sonnet 27 1.weary「疲れた」**toil**「骨折り仕事」**haste**=hasten「急がせる」**2. repose**「休息」**limb**「手足」**4. work**「働かせる」**expire**「終わりにする」**5. abide**「住む」**6. intend**「しようとする」**zealous**「熱烈な」**thee**=you **7. droop**「垂れる」**eyelid**「まぶた」**wide**=widely 形容詞が副詞の代わりに用いられている。**9. save that** (that) 以下のことを除いて。**imaginary**「空想の」**sight**「視力」**10. present**「提示する」**11. hang<hung hung**「ぶら下げる」**ghastly**「ぞっとするような」**12. beauteous**=beautiful **her** night を受ける。**13. lo**=look **14. quiet**「静寂」

～ 作者と時代 ～

エドマンド・スペンサーは、毛織物業者の子としてロンドンに生まれた。ケンブリッジ大学卒業後、レスター伯の保護を受けて詩作に励み、1579年に処女詩集『羊飼の暦』を出版して一躍有名になった。1580年グレイ卿がアイルランドの総督となるに及び、秘書として当地におもむく。1586年にこの地で地方植民開拓官となり、ついにここで一生を過ごすことになった。彼は、シェイクスピアとともに、イギリス・ルネサンス文学の華として、「詩人の中の詩人」の異名をとった。未完に終わった叙事詩『妖精の女王』は大作である。作風はキリスト教思想と、それ以外の宗教を指す異教の思想が渾然一体となっている。

ウィリアム・シェイクスピアの伝記的な事実はあまり残っていない。イギリスのストラットフォード・アポン・エイヴォンで、この町の有力者の家に生まれ、18歳で8歳年上の女性と結婚し、やがて志を抱いてロンドンに出た。当時多数生まれていた劇団に属し、端役から始めて、才能を開花させ、座付き作者となった。以後20年にわたって37篇の戯曲を世に送り出し、不朽の名声を勝ち得た。歴史劇、喜劇と書き進め、4大悲劇を書いた後、ロマンス劇を書いて故郷に帰り、錦を飾った。

ポイント

1．スペンサーのソネットは、旧字を使っているが、何か意図があると考えられますか？　日本にもたとえば丸谷才一のような旧仮名遣いを好む作家がいますが、どんな共通点が考えられますか？
2．2篇のソネットの起承転結を確認し、同じ恋愛感情の吐露の仕方の違いを鑑賞し、シェイクスピアのソネットの新しさはどこにあるかを考えてみましょう。